ドキュメント 就職

人間にとって生きるとはなにか、働くとはなにか。体制を否定しながらも、その体制の中でしか生きられぬ。この宿命を背負いながら、反体制を志向しようとする者にとって、そして、ただ、「人間として生きたいとする人間」にとってさえ、「就職」は大きな問題として、重く、重くのしかかってくる。

資本主義社会の歯車と化すか、人間として生きようとするか、僕らにとって、この二つの道しかないのだろうか。僕らが生き抜くためには、自らを〝グロテスク〟なものとせざるを得ないのだろうか。

今、あの東大闘争で語られた言葉を想い起す。「力及ばずして倒れることを辞さないが、力つくさずしてくじけることを拒否する」。もう一度、僕らは噛みしめなければならない。

彼もまた痛みを背負いつつ、論理を求めて、生を求めて歩む――。

進学、就職を拒否

状況との対決 それが生きる支え

「人間として生きる」とは (1)

橋本文夫（仮名）、宮城県に生れ、現在東京在住。本学文学部史学地理学科、四年在籍。

昼近くの喫茶店にはまだ客はまばらだった。まもなく約束の時間通り彼は現われた。長身、ウエーブした長髪の彼は、あまり気乗りのしない様子でポツリ、ポツリ語りはじめた。

大学入学当時、政治的なことに関心がなかった彼だったが、クラス委員に選出された。一年の秋、学費闘争が勃発した。

――僕達のクラスでもどのように捉えて、どのように考えていけばよいか、クラス討論を始めたわけなんです。その中から何人かの意識ある部分がでてきて、それらが中執になった。そして僕も全学闘争委に参加していったんです。一年のときには政治的なことにシンパシーを感じなかった。でも、クラス討論や勉強会などで、社会の分析や批判をしていくことによって解決していき、社会に対する目を開いていったワケ。

こうした中、学費闘争の状況が悪化するに従い、ブントは闘争委に計らず三派全学連を結成、最終的には三派全学連の維持という問題に、明大闘争はおかれてしまった。こうして学費闘争は四二年二月二日いわゆる〝ボス交〟により終結した。

――何んにも知らぬまま和泉に帰ってきてみると、バリケードは取り除かれていて、何も残っていなかった。それで闘争が終ったのかなあと思い、何かふっきれないものがあった。『何故終ったんだ』結局その中で、セクトに対する不信感というものを――偏見なのかも知れないけれど――感じたワケ。しかしここで自分をふりかえってみると、そうしたら『自分は何をやってきたのか』という形で発想さ

学費闘争「主体的」という発想

れてきて、そこが、僕はバリケードの中に入るということが客観的なものとしてしか関わりをもってこなかったんじゃなかったか。自己を対象化することなく、動いてきたんじゃなかったか。それを自分なりに考えて、もう少し主体的になっていこうじゃないかと発想されてきたんです――。

一地域を見るだけ 地理実習

こうして、彼は〝地理〟の中に戻った。そこで社会に対する眼を養うという意味で、組織をつくりある地域に実習という形で入った。こうして彼は地理学に埋没していった。

二年の十・二一の頃から、彼は免罪符としてデモに行くようになった。

三年、実習は続いた。しかしここでそれに対する疑問が生じた。

――地域をみるという視点が僕達には欠けていた。そこで教授達のいう、生産関係に視点を置くという形で発想されてきたんだけれども、そうした場合、ただ単に視点を生産関係にだけおいてもその地域がわかるかどうか。それ以前に生産関係もなんにもない、ただ単に『地域をみるんだ』と発想されてきたことが、どういうことなのかということを捉えかえしていくと、資本主義社会の矛盾なりをまず最初に僕達自身大まかでもよいから知らなければいけないんじゃないか。社会総体をみることができなくて、一つの地域だけをみることによって、果して地理学は成り立つかどうか、ということが学問論としてあった――。

この間、日大闘争が起こり、東大闘争が始まった。彼にとって人間的なものが強い日大闘争より、論理的な東大闘争がストレートに響いてきた。その中で科学論の再構築を三年生と四年生数人で行ない、科学運動を継承していった。期末試験の頃、東大闘争はその頂点に達していた。

――その頃は、一・一八、一九にはもの凄い憤りというか、もの凄い権力に対する怒りというのが大きかった。それをある程度試験に反映しようとしたんだけれど、しかし、試験そのものを粉砕するまでは高まらなかったんです。だから試験では、地理学そのものが個別化してしまって、地域的などころにとどまり、社会総体にかえらないまま現在の地理学はあるんじゃないか。このような地理学のあり方ではおかしいんじゃないかということを書いていったわけです――。

期末試験も終わると、四年生も卒業、彼と共に歩んできた先輩仲間も例外ではなかった。彼らは残る者の為にも、四年間の地理学のあり方、研究室のあり方、大学のあり方というものを総括した。残った者にはそれが足がかりとなった。

こうして彼も四年になった。そこでは教育実習が待っていた。それは、これまで彼が批判してきた現行教育体系――その中にドップリと包みこまれた以外の何物でもなかった。

――教育実習を僕自身が何故やるのか。それに対して科学論というか、学問論というものを発していこうというものがありながらも、今までの教育体系の中にあることが僕自身の痛みとしてあったんです。それでも結局続けたわけだけれども……教育実習では沖縄問題を扱ったんです。学校の先生に沖縄なんかをどういうふうに教えたらよいのかを聞いたりしながら、僕なりに現在的な沖縄というものの位置を、生徒に訴えていくことによって、教育実習の免罪というか、はかっていったんです――。

教育実習で終わると、六・二一の明大バリストが待っていた。同時に、彼には卒業後の進路を決めねばならない問題も残っていた。

彼は、大学院を目指していた。

――山本義隆の言った言葉なんだけれども、『一物理学徒として』という言葉が、僕に鮮明に訴えてきた。僕自身ある程度敬服した。人間誰しも一定の特権階級としての研究者じゃなくして、自分の問題を掘り起して、それを全体化していく、そういう作業をしていく者が研究者であろう。そういう意味での研究者になろうと位置付けしたんです――。

しかし、明大闘争を闘っていく過程で彼は再度自らに問い返さざるを得なくなった。

――大学院とか、博士過程という形で現行の教育制度があり、それに乗らなければ研究者としての位置づけが許されなかった。ところが山本義隆君の言葉にしろ、現実に、明大闘争の進展過程でネ、現在の大学院のあり方、地理学のあり方が鮮明になってくることによって、そういう発想自体が破産されてきたわけです。そこで、大学院へいくことを拒否して、そういう教育制度に乗らないところの、自らを研究学徒として地理を学ぶ者として位置づけたんです――。

今年四月、卒業して大学院へ進学するはずだった彼は、自ら大学院進学を拒否した。四年に留まった。

彼は現在新聞社でアルバイトをしている月収四万円、給料としては高い。だが日曜も祭日もない。そして夜の仕事は辛い。

現時点において、就職を拒否した。何故に就職を拒否して大学に留まるのか、それはこれまでもいくらか語られてきた。学問、地理学への執念とも言える探究者として。そして……。

――大学を卒業して就職していくというのは、形態が変わっていくわけだけれども、形態が変わると同時に、その自分の思想性までもが変わっていくような気がするんだナ。非常におごりたかぶっているのかも知れないし、非常に無暴なのかも知れない。六〇年代の連中が、会社に入ってやっていこうという構図をもっていたけれども僕の場合には、現在的な反乱が闘えないかぎりどうしようもないんじゃないか。つまり反乱の原点なり、なんなりが、現在の場所に論理として構築しえなければ。そしてまた非常に僕の場合逃げ口上なのかも知れないけれども、一つの社会なら社会という状況が与えられて、そこで如何に労働運動をやっていくかという形でなくて、一個の人間として、環を広げていって、それが総体として社会に対する反乱なら反乱という形でもってするしか、僕達の責任はないんじゃないか――。

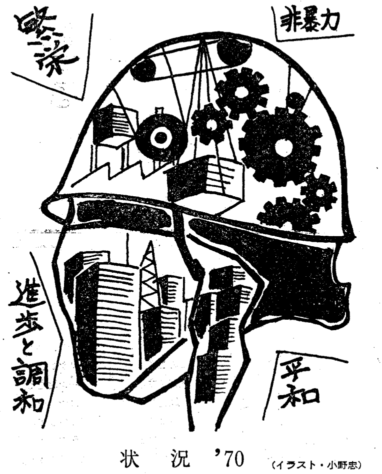
こう語る彼は、社会へ出ていった仲間を通じてもヒシヒシと感じるようだった。会社へ入ったら反戦としてめざしていた仲間は、企業の巧みな操作のもとに、考える時間さえも奪われ、規制されていく。それを目のあたりに見る彼にとっては、大学に残るしかなかったかも知れない。だが論理的につきつめて生きようとする彼にも矛盾があり、甘えもある。結局それは彼の〝傷み〟として背負わざるを得ない。

――何故、学生として生活しているのかという疑問があるわけだけれども。その辺が非常に困っているところで……甘いというか、矛盾としてはあるんだ。その痛みを感じつつも今年一年は暮らすと思うんだ。経済的なものと、自分の思想性なり、思考しているものとギャップを今年一年ばかりじゃなく、一生そのギャップのもとに通しちゃうかも知れない。あるいは「もうやめた」って、今までの生き方をかなぐり捨てて、廃人同様生きていくか、まだその判断はつかないワケ。だが全共闘運動の空間は一生不滅だと思うんだ。そして僕自身全共闘運動と同じ質をもった空間がまだ続いているし、続けたいと思う。いつかは状況というものと対決しなければならないという強迫概念としてはあるんだナ。それが現在の支えであり、生きる支えとなっている。だから痛みを感じつつやはりこの一年残ろうと思ったわけです――。

その対決に、果して彼が勝利し得るかどうか、それは誰にも言えない。ここで重要なのは、勝つからやるのではなく、勝とうと負けようと、〝やらざるをえない〟ということだ。そこからしか何物も生れ得ない。

大学に入って、同じ学部、サークルなどの先輩を知り、まず感じることは、その諸先輩の〝グロテスク〟さ。そこには、体制にドップリと組み込まれた、一般的、評論的な機械的人間になった姿しかない。その〝グロテスク〟さを感じさせない、確信はないがあくまでも〝人間として〟生きようとする、ひたむきな人間を彼にみた。

（八重樫記者）



状況 '70 （イラスト・小野忠）